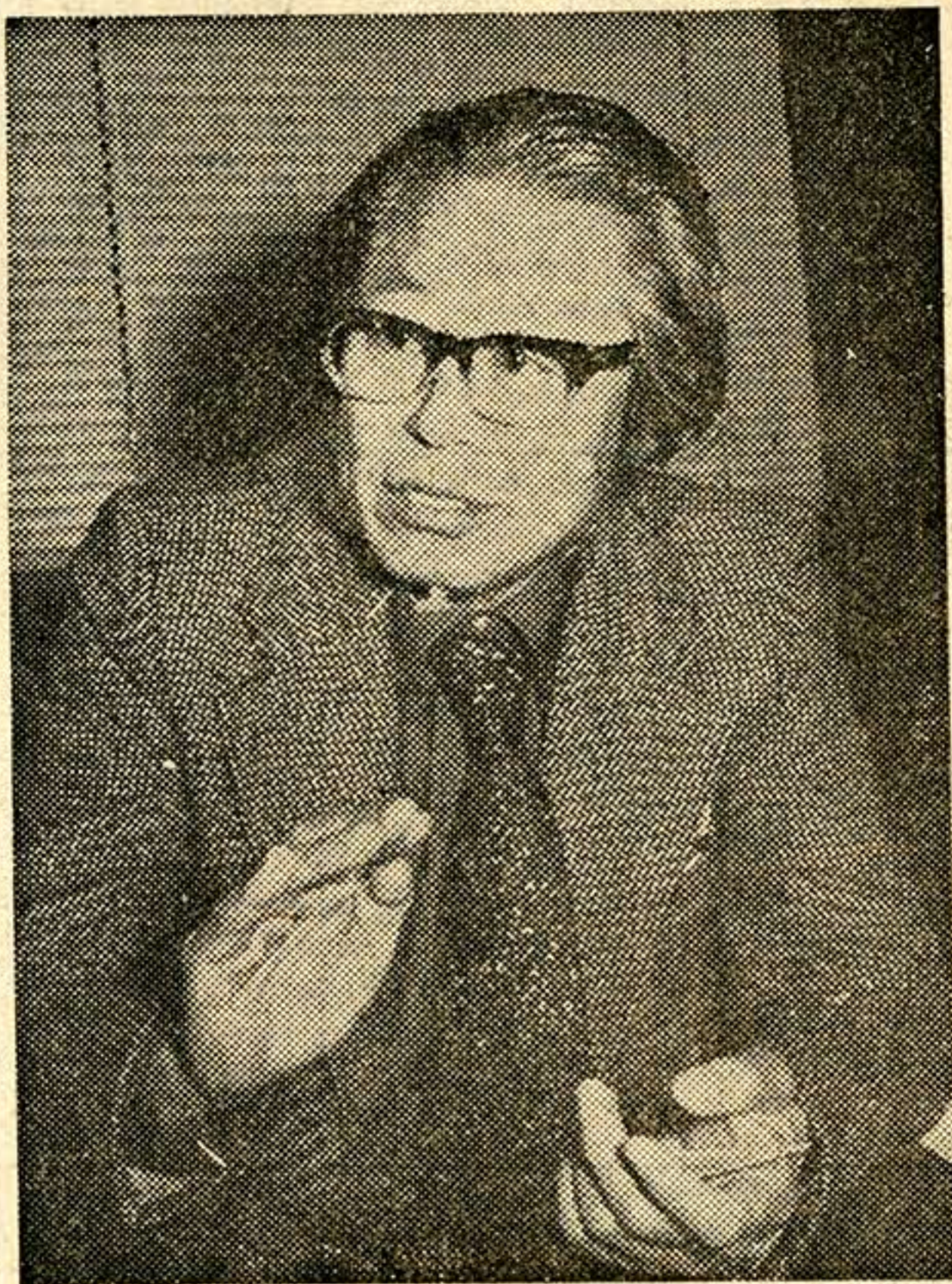


釧新郷土芸術賞に輝く

十五歳ごろから中島由多、上野山清貞、岩井弥一郎氏らに師事して画業に励み、昭和二十六年に

受賞者の横顔

増田 誠 さん
特別賞 (絵画)



ふるさと釧路への恩愛も忘れずに…増田さん

< 4 >

以後も順調、着実に画業を伸ばし、ル・サロンでは金、銀、銅賞を受賞したのをはじめ、全欧各地で数々の栄誉を獲得している。「ヴィオロン弾き」「パリ中央市

うに東京・小田急のギャラリーで個展を開き、日本のファン層も広がっている。

最近では油絵のほか、版画の制作にも手を染め、銅版、石版画に新しい技法を創造して、早くも味わい深い独得の「増田版画」の境地を生み出している。

パリッ子も舌巻く 常に新しい画境を

増田さんは「私が今日あるのは端的に行つて絵の本場であるパリで制作出来るためだ。その意味で二千年前、パリへ行くためにお世話になったいまは亡き吉田利和さんと栗林定四朗さん、現在なお世話になっている小船井武次郎さんをはじめ釧路の皆さんの厚情を忘れることが出来ない。釧路は私の第一のふるさと、昔の仲間とともに常に思いをはせている。これからもよい仕事をするのがご恩と受賞に報いる道」と語っている。

現在、各サロンの会員、審査員としてパリ画壇に確固とした地位を築き、パリの若い日本人画家の中心的存在として活躍しているが、いまだふるさと釧路への恩愛を忘れず、パリに出掛ける釧路人の面倒もよくみる謙虚な人柄、常に新しい画境を切り開く不断の精進は、道東画壇にも大きな刺激を与え続けて来ている。

(おわり)

全欧各地で栄誉数々

住するようになった。三十七歳のデバンタン、サロン・ナショナル、ドートンヌ、サロン・デ・アンブル、ピエンナレ展でグランプリを受け、サロン・ドートンヌに出品した作品がパリ市に買い上げられ、パリ画壇でも期待の作家として注目されるようになった。

翌年からはル・サロン、サロン・デ・ポザール展と各展覧会に精力的に出品、三十五年にはシエラブル、ド、哀歌をパリッ子以上に巧みに表現する。数年前からは毎年のよ

一線美術展に出品、以後二回受賞して五年後には一線美術委員になった。「青春悔い多し」と増田さんは笑っているが、支庁坂の中腹あたり旧居を継ぎ、新進として活躍していた増田さんの釧路時代を知る人は多い。やがて三十二年、志を定めてフランスへ渡り、パリに定